

試行錯誤しながら自分なりに表し方を工夫できる児童の育成

～視点を明確にした資料提示の工夫を通して～

特別研修員 図画工作・美術班 福島栄典（小学校教諭）

目指す児童像

試行錯誤しながら自分なりに表し方を工夫できる児童

実践 1 『糸のこのドライブ』

ベニヤ板を電動糸鋸で自由な形に切り抜き、組み合わせを工夫し彩色して立体に表す題材。教師が提示する参考作品は有効ではあるが、見るだけで完結してしまうことも多い。



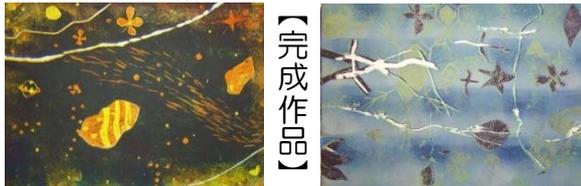
【完成作品】

変容の様子

「つなげるとどうなるかな」「ぶら下げてみると面白くなるかな」と視点を意識して組立て方を工夫する姿が見られた。

実践 2 『色重ねて、ゆめ広げて』

彫りと刷りを交互に繰り返して多色版画に表す彫り進み版画の題材。色の選択と重ねる順序によって作品の雰囲気異なるので色を意識することはとても重要である。



【完成作品】

変容の様子

一色目を刷る際に、デザインから寒さをイメージし、色の重なりを考えて2色目を刷っていた。色を意識していることがうかがえる。

質の高い試行錯誤

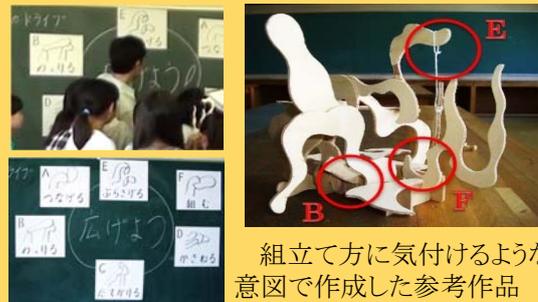
視点の意識化

視点を絞った資料の提示

（視点：組立て方を工夫する）

【自ら組立て方を見付ける資料の提示】

「作品からどんな組立て方が見付けられるかな？」



組立て方に気付けるような意図で作成した参考作品

「つなげたり」「ぶら下げたり」…すればいいんだね。どんなつなげ方ができるかな？」



視点を絞った資料の提示

（視点：色の重ね方を工夫する）

【クイズ形式による資料の提示】



「『黄→赤→青』の順に刷られた作品はどれ？」



色の重ね方がどのようになっているか、色がどのように変化していくか提示し、色を意識できるようにした。



黄色の上に赤色を重ねるとこんな風になるんだ！じゃあ最初は何色にしようかな？」

色ってどうやって決めればいいの？」



どこを工夫すればいいの？」

何をどのように工夫するのが不明瞭

児童の実態

材料の特徴を生かして発想する際、何をどのように工夫するのかについて個で差があるため、十分な試行錯誤につながらない。

成果

- 発想・構想の視点を明確にすることは、児童が自分なりの工夫を生み出す助けになることが分かった。
- 児童が生み出した新たな工夫は相互鑑賞などにおいて共有することにより、自分では思いつかなかった工夫を自分の作品に生かしていくことができる。

課題

- 何をどのように工夫するかという視点を与えたことで、それを視点として試行錯誤をする児童もいるが、特定の視点にとらわれてしまい、新しい視点を自ら探す姿につながらない場面もあった。